

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 186号

平成29年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

### 新渡戸稲造「人生雑感」より (6)

#### 母の力 (1)

詩人ローエルの詩の中に、メスとオスとの鳥の歌がある。雄は世界に対して大声に歌い、メスはオスを相手に巣に向かって細い声で歌っている、天の耳にはどっちの歌が秀でて響き、人間の耳にはどっちの歌が優れて聞こえるかという詩である。もちろんその意味は、メス鳥の細い声を賞したものではあるが、細い声が如何に大なる力を持っているやは、天の外に知っているものはない。しかしこの天以外にはわからぬような、誰も知らぬような声が、実に偉大なる力を有するものであるから、人にわからぬからとて度外視することはできぬ。またその力を感じぬわけにも行かぬ。

## 母の力 (2)

余は書生と交際が多いので、時々彼らにどうして学問しているかと尋ねているみるに、母の力によって学問しているというものの方が多いようである。たとえば女の子にしても、小学校を卒業後、父は「女は学問はいらぬから、家で家事でも見習わしておけばよい」という。娘はなかなか承知せず、母に頼むと、母は一晩くらい眠らずに考えて、「どうかして私の力でも娘の1人位は学問させることができそうなものだ。いままでは朝6時に起きたが、これからは朝も4時から起き、夜は10時に寝たのを1時頃まで内職してでも、あれ程に望む学問をさせてやろう」と決心して、子供を学校へやる。これは決してまれな場合ではない。母は楽しむ時間は言うまでもなく、眠る時間さえ割いて働いていても、世間には聞こえぬ。かの小さきひなを相手に歌うメスのごとく、誰の耳にもその声は達しない。

### 母の力 (3)

しばしば年とった婦人などは、私は明治の教育をうけぬから駄目です、今の子供は親の言うことを聞かぬと言っているが、それは間違いである。どんな親不孝な者でも、母の力を感じぬものはない。先日余は 700 人ばかりの生徒に、親に孝行を尽くすには種々の方法があろうが、東京において郷里の父母に孝行するのも手近いことで容易にできる。葉書でよいから、寒い時には、この寒さにお母様はいかがです、私は達者で勉強しております、今日はあなたの事を思い出しました、と書いてやれと申しました。その翌日聞いてみると、その日にたくさんの生徒が葉書を出したそうです。袖を肩までまくりあげて、見たところでは、不孝面をした書生でも、この通り母の力を感じている。

## 母の力 (4)

「先生私は聞きたいことがあって参りました。今日母から手紙が来まして、その中に私は若い時から神や仏を拝むことはしなかったが、お前方二人が遠く離れて、わずかの学費で勉強していることを一時も忘れる暇がないので、このころは年のせいか、それを思うと神社仏閣の前を通るたび、知らず知らずに頭が下がる、と書いてあります。私は、今まで宗教に重きを置かなかつたが、他人ならば知らず、私の母が神を拝むなどというならば、宗教というものは、何か一種の力を持っているものではないかと考えます。それを伺いにまいりました。」と行って、涙をほろほろとこぼした。余は「それは年のせいではない。心に何かある物を求めているのである。人間は己れ以上の頼むものがなくてはならぬ。いまお前のお母さんは人生の味が解りかけて来た時である。キリスト教的に言えば、聖霊が正に宿らんとしている肝要な時である。必ず心配するな」と言ってやりました。この人は今は立派な信者になっております。彼は実に男らしい、活発な書生であった。

## 母の力 (5)

母の力は実に偉大なものである。余は自分の事を思うとよくわかる。余は9歳の時、盛岡から東京へ来たが、それから10年ぶりで19の時故郷へ帰った時は、母の死後3日目であった。この10年間に母から受け取った手紙は、出来るだけ大切に保存して、いまも一年位2、3度ずつ取り出して読むが、心地のよいものである。余はすでに40の坂を4、5年前に越したが、母の手紙を読むと、幼き時を思い出す。

「近頃寒いから体を大切にせよ、母に似て馬鹿なものと言われぬように気をつけてくれ（父は幼時死せり）私のことを思うなら、よく勉強してくれ」とあたかも日曜学校の先生が生徒に教えるように書いてある。余はこれが30年前に受け取った手紙とは思えぬ。手紙を読むときは聖書を読むときのように、実に神聖な心持になる。自分のために母の書いてくれた言葉は、自分には偉大なる賜物である。

## 母の力 (6)

ある時余が山陽道を旅行してある宿屋に泊まったが、その隣室に3人づれの婦人客があった。日本の旅館の事だから隣の客の話はよくわかる。余は一人つくねんとしていると、おばあさんらしい1人が入浴に出て行った後に、20歳前後の二人の娘が残って色々な話をしていた。——いまこの二人の名を仮にお梅お竹とつけておく——お梅さんがお竹さんに、「あなたはお母さんがあって幸福ですね、あのおばあさんは優しくしてくれますが、それでもうれしい時や悲しい時は、真の母が生きていたらと思いますよ」といっても、お竹さんは返事がない。お梅は、お竹さんに、あなたはそうは思わないのと再三尋ねますと、お竹さんが、「私は本当にすまないが、お母さんなんか、無い方がよいと思いますよ」と言った。…するとお竹さんは語を次いで、「私一人きりなら死んでしまいたいと思うけれども、お母さんに貢をしなければならぬので、こんないやな稼業もしなくてはならぬ、一層お母さんの無い方がよいと思うのです」と述べた。余はいろいろの書物を読んだが、この時のように人生の味の深い言葉を見出したことはない。

## 母の力 (7)

母の力を濫用するとかえって祟りが来る。母の力は大なるものと思うと同時に、その使用は清く正しくなければならぬ。母の力を父のごとく圧制的に用いることは断じていけぬ。母の力は透き通るような清きものでなくてはならぬ。古今集に、

みどりなる一つ草とぞ春は見し

秋はいろいろの花にぞありける

とあるように、子供がやや成長するに従い、母の及ぼす感化の力によって、種々の人物となるものである。余は教室へ入る前には、戸の外で誠心誠意をもって生徒を教えることを黙禱して入るが、母たる人もどうか誠心誠意をもって子供を教育してもらいたい。言語や動作などは第 2 のものであるから、真心から出たことなれば、怒るも笑うもかまわぬ。ある時は火の付くように叱っても、またなめるようにかわいがっても、すこしも差し支えはありませぬ。常に真心をもって子に対することを、朝夕神に黙禱して頂きたいと思います。